

## 仏訳『デカメロン』研究 I

——ローラン・ド・プルミエフェ、翻訳者又は教訓家——

平手 友彦

### 1. 始めに

翻訳が新たな文学の成立に一つのきっかけを与えることがある。中世末期からルネサンスにおけるボッカチオBoccaccioの『デカメロン』*Decameron*の仏訳は正にその好例であろう。仏訳『デカメロン』はその後のフランス「ヌーヴェル」*nouvelle*文学の発展に大きな影響を与えることになる。今、ヌーヴェルの起源と発展には立ち入らない。<sup>(1)</sup>問題はその仏訳、即ち1414年<sup>(2)</sup>にローラン・ド・プルミエフェLaurent de Premierfait (以降ローラン) が初めて完成した仏訳『デカメロン』*Decameron* (ある写本によれば*Cent Nouvelles*) である。

ローランの仏訳『デカメロン』が当時のフランス文学に与えた直接的影響については『サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル』*Cent Nouvelles nouvelles* (1456-1467年)<sup>(3)</sup>は勿論のことマルシャル・ド・ヴェルニュMartial d'Auvergneの『恋愛判決集』*Arrests d'Amour* (1460年頃) にも及んでいるかもしれない。<sup>(4)</sup>この仏訳はその後、1485年にアントワーヌ・ヴェラルールAntoine Vérardによって出版された後、何度も版を重ねて読者を獲得し、1545年にはもう一人のアントワーヌ、アントワーヌ・ル・マッソンAntoine Le Maçonが新たな訳を完成する。文末の「ボッカチオ仏訳作品一覧」からも、この1545年までに『デカメロン』を始めとするボッカチオの作品がフランスでどれほど人気を博していたかが想像できるであろう。この先駆者ローランは単に『デカメロン』のみならず、ボッカチオの他の作品やキケロCiceroを初めとする古典作家の翻訳・翻案者でもあり、また詩人でもあった。しかしながらローランは「翻訳者」というレッテルが禍してか、現在まで十分に研究・評価されてきてはいない。ディ・ステファノG. Di Stefanoが言うように、翻訳というジャンルの地位の低さがフランスのヌーヴェル研究を遅らせ、<sup>(5)</sup>更にローラン研究に十分な進展をもたらさなかった要因とも考えられる。

そこで本論の目的はこのローランの生涯を辿り、彼の仏訳原理と同時に仏訳『デカメロン』の意味を考察することである。もともとこの「仏訳『デカメロン』研究」は1485年のヴェラルール版の考察から始めるつもりであった。書籍商兼出版人ヴェラルールがローランの仏訳をどのように加工して世に送り出そうとしたかという「出版・編集」の意図、更にヴェラルール版とル・マッソン訳との比較から16世紀前半にボッカチオの訳に求められたもの、仏訳のあり方等を問うことにあった。今ここでは原点に遡り、ローランとその仏訳『デカメロン』の全体像に迫ってみる。<sup>(6)</sup>

「迫ってみる」などと構えてみたものの、次のような制約があることを述べておかなければならない。それは本論作成にあたって仏訳『デカメロン』の諸写本とフランコ・シモーネF. Simoneが高く評価した二つの研究書、<sup>(7)</sup>オルティスA. Hortisの研究と1903年のオヴェットH. Hauvetteの博士

論文（「参考文献」参照）を披見できなかったことである。このような条件では、まるで状況証拠もない容疑者に動機のみで殺人の自白を強要するようなものかもしれない。しかし「事件」があれば、「聞き込み」も欠かせないだろう。そこで本論文では出来るだけ多くの研究者の「証言」を収集し「事件」の全容を解明してみたい。<sup>(8)</sup>

## 2. ローラン・ド・ブルミエフェの生涯

### ローランの生年

生まれは名前よりトロワTroyes司教区のブルミエフェPremierfait村であることは想像に難くない。<sup>(9)</sup> が、しかし、生年となると途端にうまく行かなくなる。生没年がはっきりしていないのである。ボッカチオ伝訳作品の写本研究者ボッツォロC. Bozzoloは、ジョヴァンニ・モッチアGiovanni Mocciaが1383年の書簡でローランを「青年」juvenisと繰り返し呼んでいることから逆算して生年を1360～70年とし、ギャザーコールP. M. Gathercoleはそれよりも遅く1380年説を取った。<sup>(10)</sup> 1983年になってファミリエッティR. C. Famigliettiはパリの国立古文書館で新たに発見した6点の資料からローランの本名をローラン・ギヨLaurent Guillot (du Premierfait)と特定して、生年を1365年頃と推定した。<sup>(11)</sup> 更にファミリエッティは15世紀の北フランスでは出身地を名の一部として使用することはもはや時代遅れであったが、ローランが敢えて「ローラン・ド・ブルミエフェ」と名乗ったのは当時ド・ブルミエフェという貴族がいた為であり、ギヨという労働者階級でよく使われていた名前の代わりにこの貴族名を使うことで出世を目論んでいたのではないかと推測している。<sup>(12)</sup>

ファミリエッティの発見した新資料によるとローランは早くから教会に入り、1379年3月5日ノートルダム・ド・ヴィルモールNotre-Dame de Villemaurでトロワの司教ピエール・ダルシPierre d'Arciesから侍祭acolyteの位を任せられ、モッチアの書簡によるとこのトロワでローランは学究生活を送ったらしい。<sup>(13)</sup> 後にパリのナヴァールNavarre学寮でジャン・ド・モントルイユJean de Montreuilやニコラ・ド・クラマンジュNicolas de Clamangesと親交を結んだという説もある。<sup>(14)</sup>

### アヴィニオン時代

ジャン・ミュレJean Muretがモッチアにローランの詩を紹介し、モッチアがその才能を認めて時の法王庁アヴィニオンAvignonにローランを招き入れ、ローランはアメデ・ド・サルース枢機卿cardinal Amédée de Salucesの秘書secrétaireとなる。<sup>(15)</sup> このローランのアヴィニオン到着の時期をボッツォロは1383年頃、ファミリエッティは1387年頃とする。<sup>(16)</sup>

ローランのアヴィニオン滞在を裏付ける証拠は残念ながら例のモッチアの書簡しか残されていないが、ローランがこの法王庁の文学活動に参加していたことは次のことから明らかである。ある高貴な女性の追悼の詩をモッチアが書いている最中にローランの詩句が届き、モッチアはこの詩の素晴らしさに自らの詩作統行を躊躇する。しかしながら結局、モッチアはローランの詩が「難解」obscuritasであり、ギリシャ語を多用し過ぎると批評した。当時のアヴィニオンではローランの詩が「難解」であるのに対してモッチアやミュレのそれは「明解」claritasであったとされた。<sup>(17)</sup> ロー

ランのラテン詩は有名だったようで、ヴィスコンティ家Viscontiの尚書局にいたアントニオ・ロッシAntonio Loschiはローラン宛の書簡で彼をガリアGaulusの重要な詩人と褒め称えている。<sup>(18)</sup>

1395年の初めにジャン・ド・モントルイユとの第一の論争が起きる。これはニコラ・ド・クラマンジュが送った教会分裂schismeに関する手紙がきっかけとなった。批判を受けたクラマンジュは当時優位にあったイタリア・アヴィニオン派に対抗してパリの「詩風」rhétoriqueを擁護し、古代作家の文体に帰る必要性を説いた。この態度はモントルイユに支持される。ローランは反対の立場であったようで、モントルイユはローランがクラマンジュの文体を批判したこと、ペトラルカと同様にフランスの詩人を低く見ていることを批難した。<sup>(19)</sup>

### パリ時代

ゴンチエ・コルGontier Colに宛てたクラマンジュの書簡<sup>(20)</sup>によればローランはパリ到着直後にガレオット・デ・ピエトラマラー枢機卿Galeotto de Pietramalaの死（1398年2月8日頃）<sup>(21)</sup>を知り、急いで追悼の詩をアヴィニオンに書き送ったようである。ここからローランのパリ到着は1398年始めであったと推測できる。

ローランのパリにおける庇護者の一人ジャン・シャントプリムJean Chanteprime<sup>(22)</sup>のために1400年11月13(土)、ボッカチオの『名士列伝』*De casibus virorum illustrium*の初訳*De la Ruyne des nobles hommes et femmes*を完成する。この訳は逐語的な仏訳で、時にはラテン語的表現が用いられていた。<sup>(23)</sup>

ファミリエッティは新資料から、ローランが比較的早い時期にシャントプリムのもとを離れ、当時王の秘書官でより権力の中枢に近いジャン・ベルトーJean Bertautに鞍替えしたとする。ローランはベルトーが亡くなる1401年6月24日まで仕え、翌年2月14日にはベルトーの指定遺言執行官に任命され、1404年3月1日にこの執行官の職を辞する。このベルトーに仕えていた時期、アントニオ・ロッシにスタティウスStatiusの『縮約アキレウス物語』*Compendium Statii Achilleidos*と『縮約テバイ物語』*Compendium Statii Thebaidos*を捧げる。<sup>(24)</sup> これらは引用こそされていないが、1409年の再訳『名士列伝』の前兆を成すものであり、ローランがオリジナル（オリジナルは未完成）にはないアキレウスの死を書き加えたことにローランの道徳的教訓家として一面を垣間見ることが出来る。<sup>(25)</sup>

1405年ブルボン公Louis de BourbonにキケロCiceroの『老年論』*De Senectute*の仏訳*De la vieillesse*を献ずる。献辞の中でローランは自らをブルボン公の「取るに足りない書生であり臣下」*humble clerc et sujet*と呼び、『友情論』*De Amicitia*の訳が進行中であると述べる。<sup>(26)</sup> この「書生」という言葉からファミリエッティはローランが必ずしもブルボン公の常勤職ではなく、公はローランのパトロン的存在にすぎなかったと推測する。<sup>(27)</sup> ローランはこの仏訳『老年論』の序文で二つの仏訳原則を述べる。第一に俗語（フランス語）は表現が十分豊かではないので、出来るだけ分かりやすく明解な表現を用いること。第二に簡潔すぎたり、分かりにくい部分は長くはなるが説明的な文章にすること（具体的には地名・人名、出典の説明、言い替え等）。<sup>(28)</sup> しかし実際には加筆はそれほど多いものではなかった。<sup>(29)</sup> ローランとブルボン公との文学的嗜好は異なっていたため（ローランはフランス詩を軽蔑してラテン語で詩作、公はラテン語を解さずクレチアン・ド・トロワ

Chrétien de Troyesやアンドレ・ル・シャプランAndré le Chapelainを文学的理想としていた)、公からの庇護をローランが得られたことは、ひとえに公の寛大さによるものだったのかもしれない。<sup>(30)</sup>

この1405年にはジャン・ド・モントルイユとの第二の論争が起る。モントルイユが福音の戒律の代わりにリュクールゴスLykurgosの法を家のファサードに刻ませたことをローランが非難したことが端を発した。<sup>(31)</sup>

1409年4月15日に『名士列伝』の改訳*Des Cas des nobles hommes et femmes*を終えたローランは、恐らく友人ゴンチエ・コル(少なくとも1386~89年は公の秘書官)のおかげで仕えることが出来た<sup>(32)</sup>ベリー公Jean de Berryにこれを献ずる。この改訳は公の財務長*trésorier général*であるマルタン・グージュMartin Gougeを通じて1411年1月1日の贈り物として公に渡されたようである。<sup>(33)</sup>この改訳の理由は何だったのだろうか。序文でローランは改訳の理由と特徴について述べる。第一は「論のポイント」*sentences du livre*を「明解な言葉」*clair lengaige*で表現したこと。第二はあまりにも手短かに語られ、時には名前しか引用されない物語を古代の歴史家の著述を参考にして「満足のいくもの」*assouviray*にした。その結果この改訳では地名・人名の説明、古典作品の出典等の加筆で訳文はオリジナルの三倍に膨らんだ。<sup>(34)</sup>更にローランはこの改訳で同時代人の古典学習の啓発と道徳観の高揚を狙って、ヴェルギリウスVergilius、キケロ、セネカSenecaを初めとする古典古代の作家や教父、とりわけ聖ヒエロニムスHieronimusと聖イシドルスIsidorusを積極的に援用した。<sup>(35)</sup>

ファミリエッティの新資料のうちの一つ(この資料にはローランのラテン語サインも含まれる)によると、ベリー公がブルゴーニュ公の勢力に押されて自らの領地に帰る(1410年3月)直前にローランは教皇・皇帝公証人となり、同年2月20日には同僚のジャン・フランソワJean Françoisとともに以前の主人であるシャントプリムのもとに赴いた。これは皇帝カール4世Charles IVが王子シャルル6世Charles VIをアルル王国の皇帝代理人に指名した1378年の書簡の公証証書を作成するためであった。<sup>(36)</sup>

1410年頃にシャントプリムのもとでラウル・タンギRaoul Tainguyがティトゥス・リウィウスTitius Liviusのピエール・ベルスゥイールPierre Bersuireによる仏訳『ローマ史』(第1、3、4の書*décades*)の改訳を書き写した。(Paris, B.N., fr. 264-265-266) テスニエールM.-H. Tesnièreはこの改訳写本と改訳『名士列伝』のローランによるティトゥス・リウィウスの訳とが部分的に一致する点等からこの改訳はローランによるものであり、『名士列伝』改訳のための準備と位置付けた。ローランはベルスゥイールの加筆部分*addition narrative*を全面的に削除し、ベルスゥイール訳を定本としつつもオリジナルのラテン語により忠実な仏訳を目指した。<sup>(37)</sup>なおファミリエッティの推定ではローランは1401年頃には既にシャントプリムの元を離れたはずであるから、このティトゥス・リウィウスの改訳写本が1410年頃にシャントプリムの所で作成されたことはローランの行動にまた新たな謎を生むことになる。

1411年5月、王の近侍*valet de chambre du rois*であったビュロー・ド・ダンブマルタンBureau de Dampmartinの庇護下、ベリー公のために『デカメロン』の仏訳にアントニオ・ダレッツォAntonio d'Arrezzoの助けを借りて着手。1414年6月15日に完成する。(『デカメロン』仏訳の

経緯は後述。)

1416年7月9日<sup>(38)</sup>キケロの『友情論』の仏訳*De la vraye amitie*完成。現存するレニングラード写本によるとこの仏訳はダンプマルタンの要請によるものであったらしい。この結果、この訳は当初ブルボン公の為に1405年以前に着手されたが未完成に終わり、ベリー公のために再び取りかかったが、公の死後ダンプマルタンの要請に応じて完成させたという複雑な経緯を持つことになる。<sup>(39)</sup>『老年論』と同様に序文で分かりやすい日常語による仏訳を心がけ、結論にはアリストテレス Aristotelesの『ニコマコスの倫理学』*Ethica*を使用したこと、更にフランス語の貧困さについても言及する。またオリジナルへの加筆は地名の説明、語句定義、写実的比喩、当時よく用いられた擬人法の使用等であった。<sup>(40)</sup>

1418年2月1日最後の庇護者シモン・デュ・ボワ Simon Du Boisのためにアリストテレスの『経済学』*Oeconomica*の仏訳*Yconomiques*を完成する。<sup>(41)</sup>彼の友人達のユマニストと異なり、ローランは古代ギリシャの作家を賞賛し、ラテン的思考よりもギリシャ的思考を優位に置いたようである。<sup>(42)</sup>これがラテン語を仲介としたギリシャ語からの仏訳を初めて試みた要因なのかもしれない。ローランにとって重要なことは古代作家の作品を通じてローマの歴史と文明を再生すると同時に、当時ほぼ禁止状態にあったギリシャ文化の記憶を呼び起こすことでもあった。<sup>(43)</sup>ここから16世紀ユマニスムまでさほど遠くはない。しかし、時間は残されてはいなかった。

#### ローランの死

ローランはモントルイユの書簡余白の記述から1418年に死亡したと考えられる。<sup>(44)</sup>死亡原因はこの記述の表現が曖昧なこともあって諸説がある。ポツォロは(恐らく8月から流行した)疫病plague死、ギャザーコールは疫病死又は5月から6月にパリで起きたアルマニャク軍とブルゴーニュ軍の戦闘で死亡、モンフランJ. Monfrinもローランがゴンチエ・コルとモントルイユとともにこの争乱状態の中でブルゴーニュ軍に虐殺されたとする。<sup>(45)</sup>このローランの死亡については、虐殺説が自然かもしれない。というのもローラン最後の庇護者シモン・デュ・ボワは、『パリ市民の日記(1405年-1449年)』*Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*の著者によると王の「国庫番」garde des coffresであったジャック・ランペラー Jacques l'Empereurに仕えており、ローランが亡くなる前年の1417年にパリのテンプル門の守備隊長に任命された。テンプル門といえはパリの北で、1418年5月29日にブルゴーニュ軍が入市したのは南のサン・ジェルマン門であるから、地理的には離れるが入市以降は争乱状態が続いており、守備隊長が庇護者とくればローランがこれに加勢し巻き込まれたと考えることができるからである。<sup>(46)</sup>

なおローランには『テレンティウス注解』*Commentum Terentii*という作品が残されている。<sup>(47)</sup>現存する写本の最も長いもの(B.N. lat 7907)でも序文と『アンドリア』*Andria*全体、それに『エウニクキウス』*Eunuchus*の第1幕第1場までの注解のみで構成されている。第一の特徴は失われた韻律の規則性を再構築するために詩法の規範を明らかにすることであり、第二はテレンティウスの他の写本を調査して異同文を検討することであった。また詩人のあるべき姿として詩人=弁論家をテレンティウスの中に探し求めた。『デカメロン』の序文でローランはテレンティウスの六つの喜劇fablesが日々のつらい仕事に従事していたローマの人々に多くの気晴らしとカタルシスを与

えたと述べている。しかし、これらの喜劇は単に気晴らしとカタルシスのみならず、道徳教化の目的、つまり進んで行くべきことと、避けるべきことを教えるという目的をも持っていた。<sup>(48)</sup>

またローランによるユピテルJupiterに関する詩がクロード・ド・グランドリュ Claude de Grandrueによって言及されているが現存していない。<sup>(49)</sup>なお1403年頃ベリー公に捧げられたセネカの『四つの徳』*De quatuor virtutibus*の仏訳*Les Quatre vertus cardinales selon Senecque*<sup>(50)</sup>とボッカチオ作『名婦列伝』*De mulieribus claris*の仏訳*Des cleres et nobles femmes*は何れも一時期ローランの作とされたが現在は多くの研究者によって否定されている。<sup>(51)</sup>

### 3. ローランの仏訳『デカメロン』

14世紀後半から15世紀にかけてのボッカチオ

ローランが生きた14世紀後半から15世紀にかけてのボッカチオの人気はどうだったのだろうか。現代の私達からすると意外かもしれないがダンテ、ペトラルカ、ボッカチオの「イタリア三大巨匠」のうち当時最も人気を博していたのはボッカチオだったようである。ダンテは恐らく15世紀のフランスでは訳されていないし、ペトラルカは確かに読まれてはいたが、フランス語で読めた作品としては『二つの運命の治療について』*De remediis*、『勝利』*Trionfi*、『グリセルダの物語』*Estoire de Griseldis*（『デカメロン』X-10）の注解ぐらいであった。<sup>(52)</sup>他方ボッカチオは14世紀後半（1379年）のアヴィニオンに3点『名士列伝』、『異教の神々の系譜』*Genealogie deorum gentilium*、『山森泉等の名称について』*De montibus*の写本が既に伝わっていた。またルカ・ダ・ペンナ Luca da Pennaやボッカチオの友人ザノービ・ダ・ストラダ Zanobi da Stradaといった人物もアヴィニオンに姿を表わし、当時のフランスのユマニスト、ジャック・ド・ヌビヨン Jacques de Nouvionやローランとも交流のあったクラマンジュ、モントルイユ、ゴンチエ兄弟はイタリアとその文化に大きな関心を寄せていた。またクリスチヌ・ド・ピザン Christine de Pisanやジャン・プチ Jean Petitのようにボッカチオの作品から影響を受けた作家も少なくなかった。この人気は当然王侯貴族の中にも浸透しており『名士列伝』はローランが改訳を献呈したベリー公はもとより、読書家でもあるフィリップ豪胆侯 Philippe le Hardi、無畏公ジャン Jean sans Peurやシャルル・ドルレアン Charles d'Orléanに愛読され、1435年にはアンジュー候ルネ René d'Anjouが『デカメロン』を読んでいる。<sup>(53)</sup>ディ・ステファノは1400年はボッカチオの仏訳が初めて現れた年というよりはむしろボッカチオが流行していた頂点であったと述べている。<sup>(54)</sup>

本論の主人公であるローランはこのボッカチオをどのように見ていたか。ゴンチエ・コルが所蔵していたローラン改訳『名士列伝』の終わりに「ローラン・ド・ブルミエフェ作ジャン・ボッカス賞賛の詩句」*Vers faits à la louange de Jehan Bocace par Laurens de Premierfait*というラテン語とフランス語による詩がある。この詩は「イタリアの大地、詩人の中の母、豊かな雄弁家」とボッカチオの賞賛から始まり、その諸作品を概観した後、これらの「徳のある作品」*vertueux ouvrage*のおかげでボッカチオが榮譽を勝ち得ていると歌われる。<sup>(55)</sup>しかしながらオヴェットはこの詩句がローランの作ではないとしており、更にボツォロは一步進んで所有者のゴンチエ・コルの作品であったと推測している。<sup>(56)</sup>仮にこれがローラン作ではないにしても、少なくとも当時ロー

ランにきわめて近い人物がボッカチオの道徳的側面を強調していたことは容易に理解できる。

より確実なローランのボッカチオ解釈を探せば、それは歴史家としてのボッカチオ像である。改訳『名士列伝』の序文でローランはこのチェルタルドの詩人を「古代史及び人間と神に関するあらゆる諸学問の熟練者」としており、この態度は『デカメロン』でも「神と人間に関する学問と歴史を十分に学んだ人」と変らない。<sup>(57)</sup>ではこの「歴史家」からローランが学ぼうとしたことは何であったのか。それは歴史から教訓を学び、不幸の連続である歴史に対してどのように立ち向かうべきかということであった。<sup>(58)</sup>この「教訓家」ローランはまず「翻訳者」であらねばならなかった。ローランの仏訳の方法論はどのようなものだったのだろうか。

### 仏訳の方法論

古代のテキストは13世紀では作品を創作する上での素材と考えられていたが、時代が下るに従ってしばしばオリジナルにより忠実であろうとする努力がなされ始めた。13世紀末から14世紀初頭には翻案adaptationではなく翻訳traductionが企てられ、世紀中頃にはベルスウィールによるティトゥス・リウィウスの本格的な仏訳（これはローランが改訳した作品でもある）が登場する。14世紀後半になるとオレスムによる仏訳の正当性が主張され、時の王侯貴族の周りで積極的に仏訳がなされた。1401年にはニコラ・ド・ゴネスNicolas de Gonesseがシモン・ド・エスタンSimon de Hesdinの方法に倣って、ヴァレリウス・マキシムスValerius Maximusの各章の細分化して新たな逸話、主に古代作家から取った逸話（ごく希に同時代の出来事にも触れる逸話）を挿入し、豊富な注を加えた仏訳を完成した。<sup>(59)</sup>

このような仏訳の流れの中でローランが行った方法とは何であったのか。モンフランはローランの仏訳に対する考え方をケケロの二つの訳から探っている。まず第一にラテン詩の持つ崇高と重厚が俗語（仏語）によって損なわれてしまうかもしれないので、仏訳はラテン語原文から切り離されるべきではないということ。その証拠に写本の一部にはラテン語原文と仏訳が並置されていた。『老年論』では二点、『友情論』では現存しないが恐らくこの配置を持つ写本があったと推測できる。配置は訳者の序文、ラテン語原文、第二の序文、仏訳の順であった。（しかし多くの写本ではラテン語原文が削除されてしまった。）この対訳の目的はブルボン公のコスモポリットな宮廷に合わせて、「外国人」hommes d'étranges paysにも読書可能とすることであり、必要に応じて仏語からラテン語に立ち返って確認できるようにする為でもあった。第二には写本の校合を行った正確なテキストを確立することであった。<sup>(60)</sup>ローランにとってはフランス語はラテン語テキストへの「導入手段」moyen d'accèsであり、あくまでもオリジナルテキストが重要であった。<sup>(61)</sup>この二つの視点でローランの他の作品の仏訳原理を振り返っておこう。第一の原文主義は1400年の初訳『名士列伝』とベルスウィール訳ティトゥス・リウィウスの改訳に見られるが、後者についてはベルスウィール訳の修正という点から判断すればそれは当然とも考えられる。何れにしてもローランの翻訳者としての出発点はこの（ラテン語）原文主義にあったのだろう。それが次第に原文に説明的加筆を行うことで道徳・教訓的な色彩が強くなっていく。<sup>(62)</sup>この傾向は『縮約アキレウス物語』に始まり、『老年論』ではローランが語るほど実際は多くはないが、改訳『名士列伝』や『友情論』では顕著になっていく。第二の点の写本の校合は『テレンティウス注解』がその好例であろう。またこれらの他に

ローランが『老年論』、改訳『名士列伝』や『友情論』で訳文を分かり易い文にすることを強調していたが、これも道徳・教訓的加筆と意図的に結びついているのであろう。

### 『デカメロン』仏訳の過程

なぜローランはわざわざ二重訳までして『デカメロン』を仏訳したのか。現存するローランの仏訳でこのような二重訳はこの『デカメロン』を除けばアリストテレスの『経済学』しかない。『経済学』の二重訳は上述した「ギリシャ優先論」から理解できなくもない。幸いオレスムのラテン語訳が約半世紀前に完成していた。ところが『デカメロン』は同じ二重訳でも一層面倒な手続きを踏まねばならなかった。アントニオ・ダレッツォ Antonio d'Arezzoにイタリア語からラテン語に訳してもらい、それをローランがフランス語に訳すというものであった。その結果、訳が完成するまで三年を要した。外的要請、はたまた内的要求だったのか。

アントニオにラテン語訳を依頼したのは、言うまでもなくローランがイタリア語を知らなかったからである。「私は生まれも育ちもフランスなので、フィレンツェの言葉[イタリア語]は全く知らない。私はアントワヌ・デ・アレッシ[アントニオ・ダレッツォ]という名のフランシスコ修道士と知り合ったのだが、この男はフィレンツェ(民衆)語とラテン語によく通じていた」。<sup>(63)</sup>この共訳者のことは十分知られていないが、研究者の評価は高くはない。オヴェットのアントニオに対する評価は「知的にも教養的にも平均以下」という手厳しいものである。<sup>(64)</sup>仏訳『デカメロン』の序文によればアントニオは訳したラテン語『デカメロン』を書面でローランに渡したらしいが、この草稿は現存していない。<sup>(65)</sup>従ってこのフランシスコ修道士の訳の出来はローランの仏訳から類推するしか他に方法はない。

### 写本の系譜

この仏訳『デカメロン』の写本群を大別する最大の要因は、最後に位置する(X-10)有名な「グリセルダの物語」*Griselda*<sup>(66)</sup>が多くの写本ではローラン訳ではなく、15世紀初頭の仏訳(訳者不明)に差し替えられていることである。<sup>(67)</sup>現存する15写本(1点は断片写本)の内、ローラン仏訳完全版はParis, B.N., fr.129、Arsenal, 5070、Vatican Pal lat.1989の3点のみである<sup>(68)</sup>。その中の最古の写本はVatican写本で、1420年以前に無畏王ジャンの図書館に存在したと思われるが、他の写本と同様ローランの直筆ではない。<sup>(69)</sup>Vatican写本はポッカチオの序文から始まり、その冒頭でこの訳がローランによってダンブマルタンの元で完成された二重訳であることを伝える。奥付 colophonでは序文冒頭と同様の内容に加え、訳了日が示される。Arsenal, 5070はこのVatican写本に忠実で、この写本とともにフィリップ善良公の所有となったと考えられる。<sup>(70)</sup>B.N.写本はベリー公への献辞となる「訳者の序文」Prologue du translateurから始まっており、他の2写本と構成上異なる。<sup>(71)</sup>これはこのB.N.写本が基とした他の写本が存在していたことを示唆している。

### ローランによる仏訳『デカメロン』の意味するもの

ローラン直筆の写本が現存せず、また現存する写本の異同が激しいことなどからここでは『デカメロン』の序文を中心にローランにとってのこの仏訳の意味を考えてみたい。<sup>(72)</sup>『デカメロン』が



二重訳で、いわゆるヌーヴェル集でありながら、ローランの従来の仏訳方法は踏襲されているのだろうか。先に見たローランの仏訳原理を確認しておこう。第一に特に初期に見られた（ラテン語）原文主義。第二に写本の校合をとともう正確なテキストの確立。第三に後期に著しく見られる原文への説明的文章の加筆。そうすることで道徳・教訓的な色彩が強くなること。第四に訳文を平易な文にすること。

第一と第二の点は仏訳『デカメロン』が第三者介入の二重訳ということから考えて対象外としなければならない。第三と第四の点については、序文で、あまりにも簡潔すぎる部分は長くして、「曖昧な」obscurところは「明確な言葉」cler langaigeに置き換えた、と明言する。<sup>(73)</sup>その結果、説明的加筆が増え、訳文が大幅に膨れ上がることもあった。<sup>(74)</sup>これは本文の具体的な分析を待たなければ実際どのような変更が加えられたか明らかに出来ないが、ローランが仏訳『デカメロン』を道徳を説く作品moralisateurとしようとしたことは序文からも知ることが出来る。安易な読書はこの物語集の中に役に立つことよりも楽しさばかりを見つめるが、注意深い「読者はここで語られる物語に楽しさdelictよりも役に立つことprofitをより多く見つけるだろう。なぜなら、この作品の中ではあらゆる悪業は非難され、咎められ、他方で徳と思慮深さは契められ、褒め称えられる。それも物語の数の多さが示すのと同じくらい、いやそれ以上の多様さで。」

“Et combien que, selon le hastif jugement de celui ou de ceulx qui sans precedente et longue consideracion dient et prononcent leur sentence, les cent nouvelles semblent plus servir a directacion que au commun et particulier prouffit, neantmoins l’ascolteur ou liseur qui longuement et meurement advisera le compte de chacune nouvelle, il trouvera es histoires racomptees plus profit que delict. Car illec sont tous vices morsillez et reprins, et les vertuz et bonnes meurs y sont admonestees et loeez en autant et plus de manieres comme est le nombre des nouvelles”<sup>(75)</sup>

ここからローランが『デカメロン』を道徳・教訓的作品にする意図を持っていたことは明白であろう。この点は多くの研究者も認めている。<sup>(76)</sup>このような意図を持つに至ったのは何よりも当時の『名士列伝』の人气が大きく作用したようである。<sup>(77)</sup>ノールトンG.P. Nortonは『名士列伝』が先に仏訳されて広く読まれたことから『デカメロン』がユマニスト的道德観のコンテキストで理解されるようになったと考える。どうやらボッカチオの壮年期の作品『デカメロン』と晩年期のラテン語作品群との違いを見極めることができなかったローランはボッカチオの自然主義naturalismeを見落としてしまった。『デカメロン』に現れた「楽しみ」plaisir, delectationもいつの間にか「正しい」honnesteという重荷を背負わされている。（〈honneste plaisir〉, 〈honneste delectation〉）こうして純粋な喜びであるはずの「作り話」narrative fictionも人間が直面する出来事・歴史を解決する一手段と捉えられてしまった。<sup>(78)</sup>

筆者はこれらの見解に加え、ローランにとっての『デカメロン』とは『名士列伝』の道徳的教訓を探し出す実践の場ではなかったかと考えている。ノールトン流に言えば、ローランはボッカチオの壮年期の作品『デカメロン』と晩年期のラテン語作品群との違いを理解しつつも、ボッカチオの自然主義naturalismeを故意に避けた。拾い集めるべきは「役に立つこと」の例であった。先の引用にあるように『デカメロン』はその「物語の数の多さが示すのと同じくらい、いやそれ以上の多

様さで」学ぶべき徳を教えてくださいではないか。ユマニスト的翻訳者ローランがイタリア語—ラテン語—仏語の二重訳という危険を冒してまで『デカメロン』を訳出しようとしたのは『名士列伝』の生真面目なボッカチオの姿を『デカメロン』に投影させてこの物語集を読み直した結果ではなかったか。そこには『名士列伝』のような歴史上の著名人ばかりではなく、多様な階層の人々が運命に翻弄され、歴史に立ち向かう姿があった。『デカメロン』はローランにとってはまさに辿るべき格好の物語の宝庫であった。

#### 4. 終わりに

ボッカチオは序文でこの『デカメロン』を「お読みになれば、中に編み込まれたおもしろい事件で、或いは楽しむこともでき、または良い忠告を受けることもできるでしょう」parimente diletto delle sollazzevoli conse in quelle mostrate e utile consiglio potranno pigliare<sup>(79)</sup>と読者に語った。しかし、その訳者ローラン・ド・プルミエフェは自らの仏訳から読者が「楽しさよりも役に立つことをより多く見つける」ことを期待した。parimente diletto ~ e utile consigli oの並立・対等表現とplus profit que delictの比較表現の間には相当の距離があるのではないだろうか。ローランによって『デカメロン』は道徳教化の作品に作り変えられてしまったのである。

以上述べてきたようにローランにとって『名士列伝』の補完的作品とも位置付けられるこの仏訳『デカメロン』は1485年にアントワーヌ・ヴェラルールによって削除や加筆が行われて出版され、1545年にはマルグリット・ド・ナヴァールMarguerite de Navarreの命を受けてアントワーヌ・ル・マッソンが新たに『デカメロン』を訳し直す。その際二人のアントワーヌはローランの意図と成果をどの様に解釈・継承していったのだろうか。それを明らかにするためには新たな稿を起こさねばならない。

#### ボッカチオ仏訳作品一覧 (14世紀から1545年まで)<sup>(80)</sup>

年号	作品名
1384~89	<i>Griselde</i> (X-10), traduit par Philippe de Mézière d'après le texte latin de Pétrarque (S-57)
avant 1395	<i>L'Estoire de Griseldis</i> (jeu), traduit d'après le texte latin de Pétrarque (H-VIII,2)
1400(13.nov.)	<i>De la Ruyne des nobles hommes et femmes (De Casibus virorum illustrium)</i> , premièrement traduit par L. de Premierfait
1401	<i>Des cleres et nobles femmes (De mulieribus claris)</i> , traduction anonyme (H-X-1)

- 1409(15,avril) *Des Cas des nobles hommes et femmes (De casibus virorum illustrium)*,  
deuxièmement traduit par L. de Premierfait
- 1414(15,juin) *Le Decameron ou Cent Nouvelles*, traduit par L. de Premierfait (H-VII-1)
- 1431(23,oct.) Extraits du *De Casibus virorum illustrium*, traduit par Jehan Lamelin,  
d'après le texte de la première traduction de L. de Premierfait (G-301)
- 1440~50 *Le Philostrate (Il Filostrato)*, traduit par Louis de Beauveau (H-II-3)
- vers 1460 *La Théseide (Teseide)*, traduction anonyme (H-V-1~2)
- 1476 L. de Premierfait: *De la Ruïne des nobles hommes et femmes* (première  
édition de la première traduction du *De Casibus* par L. de Premierfait),  
Bruges, Colard Mansion (GG-292)  
Réimpression: 1483 (Lyon, Husz, Schabeler)
- 1484 *Des Cas des nobles hommes et femmes* (première édition de la seconde  
traduction du *De Casibus* par L. de Premierfait), Paris, Jehan du Pré(GG-293)  
Réimpression: 1494 (4, nov.) (Paris, A. Vérard); 1506(?) (Paris, A.  
Vérard)(M-I-184); 1515 (Paris, Michel Le Noir, Jean Petit); 1538 (Paris,  
Nicolas Couteau); 1538 (Paris, Petit); 1539 (Paris, J. Petit, N. Couteau)
- 1485(18,jan.) Anonyme: *Histoire de la constance et patience d'une fame laquelle se nommoit  
Grisilidis* (deuxième traduction du *Griseldis* d'après le texte latin de  
Pétrarque) (H-VIII-3)  
Réimpression: 1500 (Paris); s.d. (Vienne, P. Schenck); s.d. (Lyon, Pierre de  
Sainte-Lucie); s.d. (Paris, à l'enseigne de l'écu)
- 1485(22,nov.) L. de Premierfait: *Le Decameron*, Paris, A. Vérard (H-VII-1; GG-277~8)  
Réimpression: vers 1503 (Paris, A. Vérard); 1511 (Paris, A. Vérard); 1521  
(Paris, Veuve de M. Le Noir); 1534 (28, août)(Paris, J. Petit, N. Couteau)  
(M-IV-283); 1537 (Paris, en la rue Neuve Nostre Dame); 1540 (Paris, A.  
Girault); 1541 (Paris, Oudin Petit)
- 1491 Anonyme: *La Patience de Grisilidis* (troisième traduction du *Griseldis*),  
Troyes, Guillaume le Rouge (H-VIII-4)  
Réimpression: s.d. (Paris, Noel le Coq)

- 1493(28,avril) Anonyme: *De la louenge et vertu des nobles et cleres dames* (traduction anonyme du *De mulieribus claris*), Paris, A. Vêrard (H-X-1; GG-294~5)  
Réimpression: 1538 (Paris, Jehan André); 1538 (Paris, P. Hermier); 1538 (Paris, Jean Longis); 1538 (Paris, Giovanni Mace)
- 1493(6,mai) Jehan Fleury: *Des deux amans* (nouvelle de Gismonda, *Decameron* I-4), *translaté de latin*, Paris, A. Vêrard (H-VIII-5)  
Réimpression: 1493 (Paris, Le Cason); s.d. (Paris); s.d. (Rouen); 1520 (Lyon)
- 1498 Jean Miélot: *De la Généalogie des dieux* (14-2, 3 de *Genealogia deorum gentilium*) (G-302)
- 1499(9,fév.) Anonyme: *Généalogie des Dieux* (*Genealogia deorum gentilium*), Paris, A. Vêrard (H-X-3)  
Réimpression: 1531 (26, sep.) (Paris, Philippe Le Noir, J. Petit)
- 1503 Symphorien Champier: *Le livre du vraye amour* (nouvelle de Cimone, *Decameron* V-1, et nouvelle de Tito et Gisippo, *Decameron* X-8, d'après le texte latin de Filippo Beroaldo), quatrième livre de *La Nef des dames vertueuses*, Lyon (S-57)
- 1521 *Le Roman des deux amans Palamon et Arcita et de la belle et saige Emilia* (extrait de la *Teseide*), traduit par Anne de Graille (H-V-6)
- vers 1530 Anonyme: *Urbain le mescongneu* (*Urbano* faussement attribué à Boccaccio), Lyon, Claude Nourry (H-VI-1)
- 1531(21,fév.) Jean Le Blond(?): *Treize elegantes Demandes d'amour* (extraites du *Filocolo*, livre IV), Paris, N. Couteau, Galliot Du Pré (H-I-1; M-IV-63, 283)  
Réimpression: 1534(?) (Paris, N. Couteau, G. Du Pré, J. Longis); 1541 (Paris, Denys Janot) (GG-288)
- 1531 Anonyme: *Complainte tres piteuse de Flamette à son amy Pamphile* (*Fiammetta*), Paris, J. Longis, Pierre Vidoue (H-III-1; GG-287; M-IV-62, 138)  
Réimpression: 1532 (Paris, Antoine Bonnemère, J. Longis); 1532 (Lyon, François Juste); 1532 (Lyon, C. Nourry); 1541 (Paris, D. Janot)

- vers 1537 *Comptes amoureux par Madame Jeanne Flore (Decameron V-8)*, Lyon, Denys de Harsy (?) (H-VIII-7)  
Réimpression: 1532 (Paris, Poncet Le Preux) (?); 1540 (Lyon, F. Juste); 1541 (Paris, D. Janot)
- 1542 Adrien Sevin: *Le Philocope (Il Filocolo)*, Paris, D. Janot et J. André (H-I-9~10)
- 1544 *La huictiesme journée du Décaméron du Bocace touchant l'amytié de Tite et de Gisippe, traduite en rithme françoise par Borderye (Decameron X-8)*, s.l.n.d. (H-p.141)
- 1545 Antoine Le Maçon: *Décaméron*, Paris, E. Roffet (H-VII-3, 9, 10)

注

- (1) nouvelleの起源に関するP.ToldoとG.Parisの論争、その後の研究概観はDubuis, R., *Les Cent Nouvelles nouvelles et la tradition de la nouvelle en France au Moyen Age*, Presses Universitaires de Grenoble, 1973, Introduction, pp.1-5を、またその発展はPérouse, G.-A., *Nouvelles françaises du XVI<sup>e</sup> siècle, images de la vie du temps*, Droz, 1977、拙論「*Le Parangon de nouvelles*の特徴と問題点 - フランス、1531年、nouvelle -」、『大阪大学言語文化学』、vol. 2、1993、pp.41-53も参照。以降注での文献引用は文末参考文献にあるものについて一部例外を除き著者名、年号、頁数のみで記す。
- (2) 年号は1月1日をもって1年の始まりとするいわゆる「新式」nouveau styleを使用する。なお年の始まりについては二宮敬「ルネサンス雑話(4)年の初めについて」、『学燈』vol. 70、昭和48年1月号、pp.42-5が参考になる。
- (3) この著者はローランの仏訳を知っており、自著をこの仏訳*Decameron (livre de Cent Nouvelles)*にあやかって*Cent Nouvelles nouvelles*と題したとPhilippe le Bonへの献辞で記す。*Les Cent Nouvelles nouvelles*, édition critique par F. P. Sweetser, Droz & Minard, 1966, p. 22 また*Cent Nouvelles nouvelles*が編纂された当時(1467年)、当のPhilippe le Bonはローランの仏訳*Decameron*の写本をJean sans Peurから受け継いだ1点を含めて3点所有していた。Doutrepont, G., *La littérature française à la cour des Ducs de Bourgogne*, H. Champion, 1909, p.332
- (4) Purkis, 1949, pp.33-4
- (5) Di Stefano, Dal "Decameron", 1977, p.92 本論文の参考文献からも分るようにローランの研究は専らアルプスの向こう側と大西洋の彼方からなされ、フランスでの研究は少ない。このフランスでの不人気は後述するようなラティニスト詩人ローランの「反フランス主義」も

微妙に影響しているのかもしれない。

- (6) 今Vérard版まで手を伸ばさないことには一つ理由がある。それは*Histoire de l'édition française, t.I, Le livre conquérant du Moyen Age au milieu du XVII<sup>e</sup> siècle*, Promodis, 1982, p. 193に記載されたMary Beth Winnの研究(Vérardのprologueに関する研究と思われる)が現在Droz書店より刊行準備中で今春発刊予定という情報を得ており(筆者はその旨を伝えるメールを昨年10月にDroz書店より受け取っている)、この研究が現在のVérard研究に大きな進展を与えるかもしれないからである。ただし予定通り刊行されることをあまり期待はできないのだが。(校正段階でDroz書店に問い合わせたところ、6月、遅くとも7月には出版の運びになり、9月のカタログに掲載予定とのこと。1997年3月19日)
- (7) Simone, Giovanni Boccaccio, 1971, pp.52-6
- (8) 更に追い撃ちをかけることになるかもしれないが、CucchiとLacyが準備していたはずの*Decameron*の校訂版(Cucchi & Lacy, 1974, p.483)、Salwaが1981年にワルシャワ大学に提出準備していた*Decameron*原典、ローランの仏訳、Vérard版の比較研究(Salwa, 1981, p.122)についてもその後の情報を残念ながら得ていない。
- (9) Bozzolo, 1973, p.4
- (10) このépître de Moccia: *Ad incredulum et de ignota re contententem*はOrnato, 1969, pp. 224-6に原文がある。Bozzolo, 1973, p.4; Gathercole, *Illuminations*, 1963, p.388, N.1
- (11) Famiglietti, 1983, p.29 この新資料6点とはJ734 nos.7-7quinqueの5点とJ612 no.46bisの1点であり、ローランの生涯の「謎」の解明に大きく貢献した。なおFamigliettiはローランの本名が既に1869年にBaron Kervyn de Lettenhove校訂の*Froissart*のnoteに記されていたが、この記述の出典が欠落していた為その後注目されなかったとしている。(ibid., p.29)
- Famigliettiが引用していないので参考までにその問題部分をVerlagのリプリント版で確認してみよう。
- 《Il existe un acte de l'évêque de Troyes du 5 février 1378, où est cité Laurent Guillot de Premierfait (Premierfait est un village de la Champagne) cleric de son diocèse. En 1404, Laurent Guillot de Premierfait acquit de son frère Guillaume Guillot pour la somme de trente livres tout le droit qu'il avait dans une maison, grange et pourpris situés à Premierfait et ayant appartenu jadis à Pierre Guillot et à Elison sa femme.》(*Œuvres de Froissart*, publiés par M. le baron Kervyn de Lettenhove, *Chroniques*, t.9, 1377-1382, Osnabrück, Biblio Verlag (Réimpression de l'édition 1867-77), pp.547-8 このacteについて詳細は記されていない。なおBozzoloはこのBaron Kervyn de Lettenhoveの記述に言及しているが、Laurent GuillotがLaurent de Premierfaitであることに懐疑的である。Bozzolo, 1979, P.444, N.1
- (12) Famiglietti, 1983, pp.28-9
- (13) ibid., p.29; épître de Moccia, *op. cit.*
- (14) Bozzolo, 1973, p.5

- (15) Ornato, 1969, p.11, N.57; p.114 Mocciaとローランとの交流はCovilleが詳しい経緯を述べているが、ローランをJohannes de Merutoと混同するなどの誤りがあり正確さを欠く。Coville, 1934, p.241; 1941, pp. 386-91 なおこの時期のアヴィニオンでのフランス人とイタリア人との接点についてはPurkis, 1949, p.24
- (16) Bozzolo, 1973, p.5; Famiglietti, 1983, p.29 Purkisによればローランのアヴィニオン到着は1397年の終わりで、その後枢機卿の秘書となった。Purkis, 1949, p.22
- (17) この経緯についてはBozzolo, 1973, pp.5-7を参照。この女性はBozzoloの説ではElinora Rotronchina (Ratoncini)。しかし彼女についての資料は残されていない。Covilleは明らかに間違っこれをcardinal Galeotto Tarlati de Pietramalとする。Coville, 1941, p.406
- (18) ローラン宛のこの書簡はPicco, 1933を参照 (抜見できず)。Bozzoloによればこの書簡は1394年秋から翌年の夏に作成された。Bozzolo, 1973, pp.11-2
- (19) この批難は*Si Thersitem* (épître 97 de Jean de Montreuil) Ornato, 1969, p.72, N.13に見られる。この論争については*ibid.*, pp.15-31, p.236; Bozzolo, 1973, p.11を参照。
- (20) この書簡*Ad eundem*はCoville, 1935, pp.303-4に原文がある。
- (21) Bozzolo, 1979, p.445
- (22) このJean Chantepremeは当時三人存在し、Bozzoloは*conseiller au Parlement, président de la chambre des aides et doyen de Notre dame de Paris*の人物としたが (Bozzolo, 1973, p.8, N.1)、貴族の称号を持ち1399年4月29日にCharles VIから*chambre des comptes*の*officier de trésorier et garde des chartes du roi*の位を受けた人物と考えるべきであろう。Famiglietti, 1983, pp.30-1, N. 22
- (23) *ibid.*, p.37; Gathercole, 1960, p.366
- (24) Famiglietti, 1983, pp.30-3
- (25) Bozzolo, 1991, pp.68-9『縮約テバイ物語』の批評版テキストはJeudy, 1979, pp.422~438を参照。なおBoccaccioも1339~40年頃Statiusの*Thebais*を研究していた。Hauvette, 1914, p.90
- (26) Bozzolo, 1973, p.8 なおこの*De Senectute*と*De Amicitia*はLouis de Bourbonの依頼に応じてローランが仏訳したものである。Doutrepoint, *La littérature française, op.cit.*, p.XVI
- (27) Famiglietti, 1983, p.34
- (28) 《L'une, pource que en langaige vulgar ne peut estre gardee plainement art de rhetorique, je useray de paroles et de sentences promptement entendibles et cleres aux liseurs et escouteurs de ce livre sans riens laisser qui soit de son essence; l'autre chose est que ce qui semble trop brief ou trop obscur, je le alongiray en exposant par mots et par sentences.》 (*De la vieillesse*, B.N., fr. 1020 f.3) Purkis, 1949, p.27より引用。
- (29) 加筆の分析はGathercole, 1960, pp.366-7
- (30) Famiglietti, 1983, p.34
- (31) この第二の論争についてはOrnato, 1969, pp.237-8; Bozzolo, 1973, p.13を参照。

- (32) Famiglietti, 1983, p.35
- (33) *ibid.*, p.35; Bozzolo, 1973, pp.146-7 Famigliettiはローランがこの改訳の献辞で自らを Jean de Berryの *clerc et vostre moins digne secretaire*と呼んでいること等から王直属ではないにしても尚書局の秘書官であったとしている。Famiglietti, 1983, p.35
- (34) Bozzolo, 1973, pp.16-7; Purkis, 1949, p.27; Koepfel, 1885 (披見できず)
- (35) Gathercole, 1960, p.368; Famiglietti, 1983, pp.37-8 改訳*De casibus*の写本の問題は Bozzolo, 1973, pp.15-23を参照。Gathercoleの*De casibus*研究の問題点はBozzolo, 1973, p.3; p.22
- (36) Famiglietti, 1983, p.36
- (37) この部分の記述はTesnière, 1986参照。
- (38) Bozzolo, 1979, p.446
- (39) Famiglietti, 1983, p.34
- (40) 《Et en ces choses disant je useray de si apert et si commun languaige que les hommes moyennement lettrez me entendront entierement et tost secondement je mettray en somme et soubz briefce tout ou la plus grant partie des conclusions ou sentences mises et affermees par Aristote en ses deux livres de Ethiques cy paravant nommes.》 (*De la vraye amitie*, B.N., fr. 1020), 《mon langaige vulgar qui par necessité de motz est petit et legier.》 Gathercole, 1960, pp.367-8より引用。加筆については*ibid.*, pp.367-8参照。
- (41) この訳にはOresmeによるラテン語訳(1370年頃)が利用された。Purkis, 1949, p.32 なおこの『経済学』はTheoprastosの著書である可能性が高い。
- (42) 《philozophe grec escrici plus amplement et mieulx que ne fist oncques homme dont les Latins aient levé la doctrine》 (*De la vraye amitie*, B.N., fr., 126, f.159) Bozzolo, 1991, p.76より引用。その証拠にギリシャ優先の現れとしてローランは殆ど総ての修辞 figuresをラテン語ではなくギリシャ語で表そう努力した。*ibid.*, p.76
- (43) *ibid.*, pp.76-7
- (44) 《Iste Laurentius, cognomento de Primofato, fuit poeta et orator eximius decessitque Parisius anno domini MCCCCXVIII, ...》 (épître 29 de Jean de Montreuil) Bozzolo, 1973, p.9より引用。この書簡は例のローランとMontreuilとの第二の論争でローランから非難されたことを伝える書簡(宛名人不明)である。Bozzoloはこの記述がJean Le BègueによるとのG. Ouyの見解を紹介している。*ibid.*, p.9, N.5
- (45) Bozzolo, 1979, p.446; Gathercole, 1963, p.388, N.1; Monfrin, *Humanisme*, 1964, p.237 1418年当時のパリのすさまじい様子は渡辺一夫『乱世の日記』、『渡辺一夫著作集』増補版第9巻、筑摩書房、1977年、p.65seqを参照。
- (46) *Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, éd. par C. Beaune, Le Livre de Poche, 1990, p.101, n.31 このJournalではSimonnet du Boisとある。Tuetey版の注ではこのSimonnet du BoisはDuc de Bourgogneへの1418年6月4日付書簡に添付された捕虜リストに記



載されている人物と同一人物ではないかとされている。 *Journal d'un bourgeois de Paris 1405-1449*, publié par A. Tuetey, Champion, 1881, p.80

- (47) Bozzolo, 1984, pp.93-129参照。(披見できず)
- (48) この部分はBozzolo, 1991, pp.70-1による。
- (49) Claude de Grandrue, *Catalogus codicum manuscriptorum Sti Victoris Paris.*, *Illum alphabetum*, 1513, ms. MMM9, ff.128-30 (Bozzolo, 1973, p.7より)
- (50) 今日ではSenecaではなくMartin de Bragaの作品とされている。Chavy, 1988, p.955
- (51) Doutrepoint, *La littérature française, op. cit.*, p.129; Gathercole, 1958, p.265; Bozzolo, 1973, p.8, N.3; p.24
- (52) Simone, Giovanni Boccaccio, 1971, pp.57-8
- (53) この部分の記述はSimone, *La présence*, 1971, pp.17-8; p.21に負う。
- (54) Di Stefano, 1971, p.7
- (55) 《Jehan porte sur sa teste couronne de lorier, / Qu'il vivant desservit, par vertueux ouvrage. / Car tous ses livres sont de vertu droit ymaige, /》 Gathercole, *A Frenchman's*, 1963, pp.225-7より引用。
- (56) Hauvette, 1903, p.22 (Gathercole, *A Frenchman's*, 1963, p.230, N.5より); Bozzolo, 1977, p.17
- (57) 《expert en anciannes histoires et toutes aultres sciences humaines et divines》 (*Des Cas*, B.N., fr.131, r. 1v), 《home bien enseigné en sicence et histoires divines et humaines》 (*Decameron*, B.N., fr. 129, f. 1v) 何れもDi Stefano, 1971, p.15より引用。
- (58) Simone, *La présence*, 1971, p.29
- (59) この部分の記述はMonfrin, *Humanisme*, 1964, pp.218-33による。
- (60) 《pour ce que aucuns qui ce livre verront mis en langaige françois diront, comme je pense, que la magesté et la gravité des paroles et sentences sont moult humiliees et amointries par mon langaige vulgar,》 《Et pour ce que a vostre court et presence, comme des autres seigneurs princes, accourent et surviennent tant pour necessaires comme pour honnestes causes plusieurs hommes de divers estatz et d'estranges pays, dont les aulcuns lisent et entendent le langaige françois et les autres le latin, j'ay mis au commencement de vostre volume et après cestui prologue le texte de tout le livre tres correct et distincté selon la forme et maniere par moi gardee ou Livre de Vieillesse, et afin aussi que promptement l'en congnoisse se le latin soit tel en sentence comme yert le françois que j'ay estraict d'ilec》 (*De la vraye amitie*, B.N., fr. 1020, fol. 53 v., 54) *ibid.*, pp.235-6 より引用。
- (61) これはブルゴーニュのユマニスト達からの影響なのかもしれない。 *ibid.*, pp.234-7
- (62) Gathercoleは不明確な部分を説明的な文で補うばかりではなく、比喩や擬人法を用いて訳文を生き生きとした例も挙げている。Gathercole, 1960, p.370
- (63) 《Et pource que je suis françois par naissance et conversation, je ne scay plainement

laingage florentin ... je ay convenu avec ung frere de l'ordre des cordeliers, nommé maistre Antoine de Aresche, homme très bien sachant vulgar florentin et laingage latin ...) (*Decameron*, B.N., fr. 129, f. 3r) Bozzolo, 1973, p.26からの引用。

- (64) Hauvette, 1909, p.72 このAntonioに関する研究はBozzolo, 1973, pp.26-7を参照。
- (65) Di Stefano, 1971, p.9, N.37
- (66) この物語は1373年6月*Decameron*から独立してPetrarcaによってラテン語に訳され、このPetrarca訳から仏訳が現れた。文末「ボッカチオ仏訳作品一覧」を参照。*Griselda*の研究とテキストはGolenistcheff-Koutousoff, 1933を参照。
- (67) Bozzolo, 1973, p.27
- (68) 他の12写本中最古の写本は1425~50年の間に作成された。ibid., p.28
- (69) 《ung autre livre de Bocace, autrement nommé de Cameron》, Doutrepoint, G., *Inventaire de la Librairie de Philippe Le Bon* (1420), Bruxelles, Kiessling, 1906, N° 238, pp. 160-1 DurrieuはこのVatican写本のテキストの終わりに《Laurent de premierfait》のsignatureがあることから、ローラン直筆の可能性を打ち出した。(Durrieu, *Découverte*, 1910, pp.65-8) この推論は魅力的ではあるが、著作権も確立されていない当時において写本へのサインの考え方は今日とは必ずしも同じではない。この点を考えると結論に性急過ぎると思われる。しかし、この写本はCucchi & Lacyが言うようにローランが訳した直後に(Cucchi & Lacyによれば1415年頃)作成されたことはほぼ確実と言っていいかもしれない。(Cucchi & Lacy, 1974, p.484; p.501)
- (70) Doutrepoint, G., *La littérature française, op. cit.*, p.332; Doutrepoint, G., *Inventaire, op.cit.*, p. 161; Bozzolo, 1973, p.28 *Decameron*はJean de Berryに献ぜられたはずであるが、現存するどの写本にもその所有になった形跡がない。Bozzolo, 1973, p.9
- (71) ibid. p.28 多くの研究者が引用しているのはこの写本である。
- (72) ローラン直筆の写本が現存せず、また現存する写本の異同が激しいことなどからGathercoleはこの*Decameron*の評価は困難とさえ言っている。Gathercole, 1960, pp.368-9 なお文体の比較研究はDi Stefano, 1977の二つの論文を参照。
- (73) 《je Laurens assistant avec lui, ay secondement converty en françois le langage latin receu dudict frere Anthoine ... fors que j'ay estendu le trop bref en plus long et le obscur en plus cler langage》 Gathercole, 1960, p.368より引用。これはArsenal写本からの引用と思われる。
- (74) 主として各nouvelleの要約中に現れる。歴史的・地理的事項等の説明。例えばI-9。Purkis, 1949, pp.31-2
- (75) (*Decameron*, B.N., fr.129, f.1v) Di Stefano, 1971, p.16より引用。
- (76) Di Stefano, 1971, p.15; Bozzolo, 1973, p.25; Fmiglietti, 1983, p.38等々
- (77) Bozzoloはこのローラン仏訳*Decameron*と*De la Ruyne/Des Cas*写本の15世紀における作成数を次のように分類した。

仏訳『デカメロン』研究 I

	1401～25年	1426～50年	1451～75年	1476～1500年
<i>Decameron</i>	1	2	6	1
<i>De la Ruyne/Des Cas</i>	9	5	29	4

装飾が施された貴重品としても考えられた写本の数量比較は単純にはできないが (Monfrin, *Les traducteurs*, 1964, pp.247-8)、この数字に見ることができる明らかな変化は15世紀後期までのフランスでは*Decameron*よりも*De casibus*の方が人気があったことを示している。他方、次の数字はBrancaの研究 (Branca, V., *Tradizione delle opere di Giovanni Boccaccio*, Roma, Edizione de Storia e letteratura, 1958-91, t.1, pp.3-12; t.2, pp.17-22; pp. 73-146) からイタリア語写本 (不完全写本を含む) の作成時期を筆者が分類したものである。(カッコ内はオリジナル完成年)

	14世紀	15世紀	16世紀
<i>Decameron</i> (1353年)	19	42	8
<i>De casibus</i> (1360年)	14	52	4

この数量変化からはフランスのような『名士列伝』の際立った人気はイタリアでは見られない。なお仏訳では最後の25年間、イタリア語オリジナルでは16世紀に写本数が激減するのは、この時期に印刷本が出版されたからであることは言うまでもない。

- (78) Norton, 1972, pp.377-84 Nortonは*Decameron*のテキストを直接写本からではなく Hortis, 1879から引用している。なお Gathercoleによれば*Decameron*本文には「道徳的所見」 moral observationもつけ加えられているとのこと。Gathercole, 1960, p.369
- (79) 和訳は『デカメロン(十日物語)』(一)野上素一訳、岩波文庫、1948、p.49;テキストは Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di V. Branca, Torino, Giulio Einaudi, 1991, Proemio p.9に拠る。
- (80) 作成に当たっては Hauvette, 1909, pp.136-9を基礎にして以下の文献を使用した。H: Hauvette, 1909; G: Gathercole, *The French translators*, 1969; GG: Gathercole, *Boccaccio in French*, 1969; S: Simone, *Giovanni Boccaccio*, 1971; M: Moreau, B., *Inventaire chronologique des éditions parisiennes du XVI<sup>e</sup> siècle*, Imprimerie Municipale, 1972-92, 4 vol. 写本は作品名と訳者の順で、印刷本は訳者、作品名、出版地、出版元の順で記した。Réimpressionは再版を示し、出版年、(出版地、出版元)とした。

参考文献

Bianchi, A.M., "La Théséide de Boccace", in *Revue des études italiennes*, t. 21, 1975, pp.304-29

*Boccace en France, De l'humanisme à l'érotisme*, Bibliothèque Nationale, 1975

Bozzolo, C., "Manuscrits des traductions françaises d'œuvres de Boccace dans les

bibliothèques de France”, in *Italia medievale e umanistica*, t.11, 1968, pp.1-69

-, *Manuscrits des traductions françaises d'œuvres de Boccace XV<sup>e</sup> siècle*, Padova, Editrice Antenore, 1973

-, “L’humanisme Gontier Col et Boccace”, in *Boccaccio in Europe, proceedings of the Boccaccio Conference, Louvain, December 1975*, Leuven, Leuven University Press, 1977, pp. 15-22

-, “Le Dossier Laurent de Premierfait”, in *Italia medievale et umanistica*, t. 22, 1979, pp.439-47 [Bozzolo, C. & Jeudy, C.論文の一部]

-, “Laurent de Premierfait et Térence”, in *Vestigia Studi in onore di Guiseppe Billanovich*, Rome, 1984, t.1, pp.93-129

-, “La lecture des classiques par Laurent de Premierfait”, in *L'aube de la Renaissance*, Genève, Slatkine, 1991, pp.67-81

Bozzolo, C. & Jeudy, C., “Stace et Laurent de Premierfait”, in *Italia medievale e umanistica*, t. 22, 1979, pp.413-47

Branca, V., *Boccaccio medievale*, nuova edizione riveduta e corretta, Firenze, Sansoni, 1996

Chavy, P., *Traducteurs d'autrefois, Moyen âge et Renaissance. Dictionnaire des traducteurs et de la littérature traduite en ancien et moyen français (842-1600)*, Champion-Slatkine, 1988, 2 vols

Coville, A., *Gontier et Pierre Col et l'Humanisme en France au temps de Charles VI*, Droz, 1934; Slatkine Reprints, 1977

-, *Recherches sur quelques écrivains du XIV<sup>e</sup> et du XV<sup>e</sup> siècle*, Droz, 1935

-, *La Vie intellectuelle dans les domaines d'Anjou-Provence de 1380 à 1435*, Droz, 1941; Slatkine Reprints, 1974

Cucchi, P., *The First French Decameron: A Study of Laurent de Premierfait's translation* (dissertation), Princeton University, 1972

-, "The First French Decameron: L. de Premierfait's Translation and the Early French Nouvelle", in *The French short story*, ed. P. Crant (French literature Series t.2), University of South Carolina, 1975, pp.1-14

Cucchi, P. & Lacy, N.J., "La tradition manuscrite des 《Cent Nouvelles》 de Laurent de Premierfait", in *Le Moyen Age*, t. LXXX, 1974, pp.482-502

Desonay, F., "A propos du Décaméron et des Cent Nouvelles nouvelles", in *Il Boccaccio nella cultura francese*, a cura di C. Pellegrini, Firenze, Olschki, 1971, pp.505-20

Di Stefano, G., "Il Trecento", in *Il Boccaccio nella cultura francese*, a cura di C. Pellegrini, Firenze, Olschki, 1971, pp.1-47

-, "Dal 《Decameron》 di Giovanni Boccaccio al 《Livre des cent Nouvelles》 di Laurent de Premierfait", in *Boccaccio in Europe, proceedings of the Boccaccio Conference, Louvain, December 1975*, Leuven, Leuven University Press, 1977, pp.91-110

-, "La traduction du Decameron", dans *Essai sur le moyen français*, Padova, Liviana editrice, 1977, pp.68-96 [上記論文Dal "Decameron"を仏訳加筆したもの]

Durrieu, P., "Le plus ancien manuscrit de la traduction française du Décaméron", *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 1909, pp.342-50

-, *Le Boccace de Munich*, Munich, 1909 [surtout chap. II ]

-, "Découverte de deux importants manuscrits de la librairie des ducs de Bourgogne", in *Bibliothèque de l'Ecole de Chartes*, t. LXXI, 1910, pp.58-71

Famiglietti, R.C., "Laurent de Premierfait: The Career of a Humanist in Early Fifteenth-Century Paris", in *Journal of Medieval History*, t.9, 1983, pp.25-42

Gathercole, P.M., "Laurent de Premierfait: the Translator of Boccaccio's 《De Casibus Virorum Illustrium》", in *The French Review*, t. XXVII, 1954, pp.245-52

-, "The Manuscripts of Laurent de Premierfait's 《Du Cas des Nobles》", in *Italica*, t. XXXII, 1955, pp.14-21

-, "Two old French Traslators of Boccaccio's *De Casibus Virorum Illustrium*", in *Modern Language Quarterly*, t. XVII, 1956, pp.304-9

-, "The Manuscripts of Laurent de Premierfait's works", in *Modern Language Quarterly*, t. XIX, 1958, pp.262-70

-, "Fifteenth-Century Translation: The development of Laurent de Premierfait", in *Modern Lnguage Quarterly*, t. XXI, 1960, pp.365-70

-, "Illuminations on the French Decameron", in *Italica*, t. XXXVIII, 1961, pp.314-8

-, "The Manuscripts of Laurent de Premierfait's Works. Additions and Changes", in *Modern Language Quarterly*, t. XXIII, 1962, pp.225-8

-, "Illuminations on the French Boccaccio Manuscripts", in *Studi sul Boccaccio*, t. I, 1963, pp.387-414

-, "A Frenchman's Praise of Boccaccio", dans *Italica*, t.XXXX, 1963, pp.225-30 [Les 29 vers latins à louange de Boccace, éd. par P.M. Gathercole]

-, "Painting on manuscripts of Laurent de Premierfait. Mansucript Collections found in specific Libraries", in *Studi sul Boccaccio*, t. IV, 1967, pp.295-316

-, "Lydgate's Fall of Princes and the French Version of Boccaccio's De Casibus", in *Miscellanea di studi e ricerche sul Quattrocento francese*, Turin, 1967, pp165-78

-, "Boccaccio in French", in *Studi sul Boccaccio*, t. V, 1969, pp.275-97

-, "The French Translators of Boccaccio", in *Italica*, t. XXXXVI, 1969, pp.300-9

Golenistcheff-Koutouzoff, E., *L'histoire de Griseldis en France au XIV<sup>e</sup> et au XV<sup>e</sup> siècle*, Droz, 1933; Slatkine Reprints, 1975

Hauvette, H., *De Laurentio de Primofato qui primus Joannis Boccacii opera quaedam gallice transtulit ineunte seculo XV*(thesis litterarum facultati Universitatis Parisiensis), Paris, Hachette, 1903

-, *Les plus anciennes traductions françaises de Boccace (XIV<sup>e</sup> - XVII<sup>e</sup> siècle)*, extrait du *Bulletin Italien* de 1907, 1908, 1909, Bordeaux, Peret & Fils, 1909

-, *Boccace, étude Biographique et Littéraire*, A. Colin, 1914

-, *Etudes sur Boccace (1894-1916)*, Torino, Bottega d'Erasmus, 1968

Hortis, A., *Studi sulle opere latine del Boccaccio, con particolare riguardo alla storia della erudizione nel Medio Evo e alle letterature straniere aggiuntavi la bibliografia delle edizioni*, Trieste, 1879

Jeudy, C. & Rion, Y.-F., "L'《Achilléide》 de Stace au Moyen Age: Abrégé et Arguments", in *Revue d'histoire des textes*, t. 4, 1974, pp.143-80

Jeudy, C., "L'abrégé de la Thébaïde de Laurent de Premierfait", in *Italia medievale e umanistica*, t. 22, 1979, pp.413-38 [Bozzolo, C. & Jeudy, C.論文の一部]

Koepfel, E., *Laurent de Premierfaits und John Lydgates Bearbeitungen von Boccacios De Casibus Virorum Illustrium*, München, 1885

Laurent de Premierfait, *Des cas des nobles hommes et femme*, Book I, ed. P.M. Gathercole, translated from Boccaccio, a critical Edition based on Six Manuscripts, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1968 (North Carolina Studies in the Romance Languages and Literatures, 74)

Messina, M., "Le due prime traduzioni in francese de 《Il Decameron》", in *Revue romane*, t. 12, 1979, pp.39-54

Mombello, G., "Jean Miélot, traduttore di due capitoli della Genealogia", in *Studi sul Boccaccio*, t. I, 1963, pp.415-44

-, "I manoscritti delle opere di Dante, Petrarca e Boccaccio nelle principali librerie francesi del secolo XV", in *Il Boccaccio nella cultura francese*, a cura di C. Pellegrini, Firenze, Olschki, 1971, pp.81-209

Monfrin, J., "Humanisme et traductions au Moyen Age", in *L'Humanisme médiéval dans les littératures romanes du XII<sup>e</sup> au XIV<sup>e</sup> siècle*, C. Klincksieck, 1964, pp.217-46

-, "Les traducteurs et leur public en France au Moyen Age", in *L'Humanisme médiéval dans les littératures romanes du XII<sup>e</sup> au XIV<sup>e</sup> siècle*, C. Klincksieck, 1964, pp.247-64

Norton, G.P., "Laurent de Premierfait and the Fifteenth-Century French Assimilation of the Decameron: a study in Tonal Transformation", in *Comparative Literature Studies*, t. 9, 1972, pp.376-91

O'Gorman, R., "Two neglected Manuscripts of Laurent de Premierfait's Decameron", in *Manuscripta*, t. XIII, 1969, pp.32-40

Ornato, E., *Jean Muret et ses amis Nicolas de Clamanges et Jean de Montreuil*, Droz, 1969

Ouy, G., "Paris, l'un des principaux foyers de l'humanisme en Europe au début du XV<sup>e</sup> siècle", in *Bulletin de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Ile-de-France*, t. 94-95, 1967-8, pp.71-98

Peano, F., "Giovanni Moccia e Laurent de Premierfait: problemi di stile e di linguaggio nel primo Umanesimo francese", in *Studi francesi*, t.70, 1980, pp. 66-73

Pellegrin, E., "Note sur deux manuscrits enluminés contenant le *De Senectute* de Cicéron avec la traduction française de Laurent de Premierfait", in *Scriptorium*, t.12, 1958, pp.276-80

Picco, F., "Une épître d'Antonio Loschi à Laurent de Premierfait", in *Etudes italiennes*, t. 3, 1933, pp.241-53

Purkis, G.S., "Laurent de Premierfait: First French Translator of the Decameron", in *Italian Studies*, t. IV, 1949, pp.22-36

-, "A Bodleian Decameron", in *Medium Aevum*, t. 19, 1950, pp.67-9

-, "Laurent de Premierfait's Translation of the Decameron", in *Medium Aevum*, t. 24, 1955, pp.1-17

Salwa, P., "La primo novella del Decameron nell'edizione di Antoine Verard del 1485", in *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp.121-8



Simone, F., "Giovanni Boccaccio "fabbro" della sua prima fortuna francese", in *Il Boccaccio nella cultura francese*, a cura di C. Pellegrini, Firenze, Olshki, 1971, pp.49-80

-, "La présence de Boccacce dans la culture française du XV", in *The Journal of medieval and Renaissance Studies*, t. 1, 1971, pp.17-32

Smith, F., "Laurent de Premierfait's French version of the 《De Casibus virorum illustrium》, with some notes on its influence in France", in *Revue de Littérature Comparée*, t. XIV, 1934, pp. 512-26

Sozzi, L., "Per la fortuna del Boccaccio in Francia: I testi introduttivi alle edizioni e traduzioni cinquecentesche", in *Studi sul Boccaccio*, t. VI, 1971, pp. 11-80

Tesnière, M.-H., "Un remaniement du Tite-Live de Bersuire par L. de Premierfait", in *Romania*, t. 107, 1986, pp.231-81

Villa, C., "Laurencius", in *Italia medievale e umanistica*, t. 24, 1981, pp.120-33

#### 付記

そもそもこの仏訳『デカメロン』研究を始めるきっかけを与えて下さったのは愛知県立大学名誉教授長谷川太郎先生であった。故新村先生の蔵書整理を手伝いませんかと声を掛けて下さり、私がフランス語学とイタリア語学・文学の棚の整理を担当することになって、数々の貴重な御蔵書を拝見する機会に恵まれたのである。この刺激的な機会を与えて下さった長谷川先生にこの場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます。